

学ぶ楽しさを実感できる児童の育成

—児童の「やってみよう」を引き出す授業実践を通して—

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域
中垣 佳亮

I はじめに

私が教師を目指したきっかけは、学校という場所の楽しさにある。学校には「出会う楽しさ」「遊ぶ楽しさ」「学ぶ楽しさ」などがあり、それらの楽しさを実感してきたことで、私は様々なことに好奇心を抱き、前向きに挑戦することができるようになった。学校の楽しさを一人でも多くの児童に伝えていきたいと考えたことが、教師を目指す一番の理由である。

私の学校生活の中で、最も強く印象に残っている時間は、「学ぶ楽しさ」を与えてくれた「授業」の時間である。「授業」を通して、自分のできなかったことができるようになったとき、自分の努力を他者から認められたときなどに、強い達成感を得られ、日々やる気をもって学校生活を送ることができていた。この「できる喜び」や「認められる喜び」が、「学ぶ楽しさ」を生み出し、その楽しさが私の学校生活の充実に大きくつながっていたと実感している。

児童を成長させていくことは、教師の最も大切な職務である。私は「授業」を通して、学ぶ楽しさを実感できる児童を育てていきたいと考えた。そこで、教職大学院での理論の構築を基に、日進市の小学校における約1年半にわたる学校サポーター活動と、各1か月の教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ、名古屋市の小学校における2週間の教師力向上実習Ⅲを通して研究を行った。

以上から、本稿では「授業づくり」に焦点を当て、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにおける実践での学びを中心に、一人一人が学ぶ楽しさを実感できる授業づくりについて、自らの教師力向上の視点から考察していく。

II 主題設定の理由

1 今日的な教育課題から

中央教育審議会では、現在の児童の課題として「学習意欲の向上や学習習慣の確立」²⁾を示している。これを受け、文部科学省では、全国学力・学習状況調査、学力向上アクションプランなどを実施している。

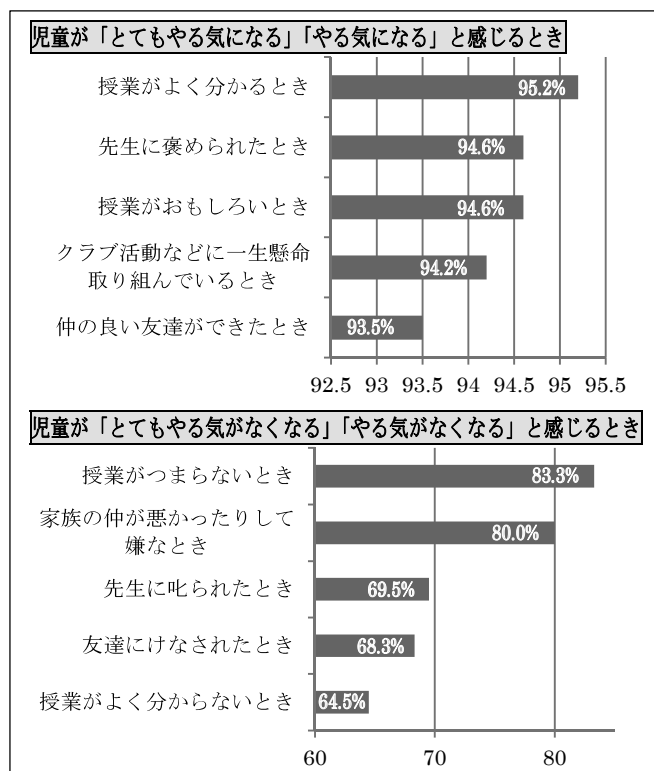
OECDによる生徒の学習到達度調査(2012)では、日本は2009年度よりも成績を上げる結果となった。しかし、重点調査対象の数学的応用力について、生徒の興味や目的意識などを問うために行われた意識調査では、日本の生徒の数学への学習意欲に改善が見られる一方で、「数学における興味・関心や楽しみ」「数学における道具的動機付け」「数学における自己効力感」「数学における自己概念」「数学に対する不安」という

数学的リテラシー得点に影響を与える5つの要因の全てが、OECD平均と比べて下回る²⁾という結果が見られた。子どもの学力の現状からも、学習意欲や学習習慣が十分でないという課題が浮き彫りになっている。

以上から、現在の教育現場においては、「学ぶ意欲」や「学ぶ習慣」が課題であることが分かった。現在の児童の学びの姿勢はどうか、児童はどのようなときに真剣に「やる気」になるのか、教師は児童の学習意欲を高めるためにどのような働きかけが必要なのかなど、児童の「学ぶ姿勢」を児童と教師それぞれの視点から捉えていきたいと考えた。

2 学力に関する調査から

国立教育政策研究所内「学習意欲研究会」では、学習動機を明らかにするための資料を得ることを目的とした「学習意欲に関する調査研究」(2000-2001)³⁾が行われた。



【図1】学習意欲に関する調査結果

(出典:「学習意欲に関する調査研究 概要」を参考に作成)

児童が最も「やる気」になるときは「授業が分かるとき」であり、逆に最も「やる気」がなくなるときは「授業がつまらないとき」であることが読み取れる。この結果から、児童の学習意欲の向上や低下には、授

業の分かりやすさやおもしろさが大きく影響していることが分かる。【図1】

また、杉山正一²⁴⁾は、小学生を対象に行った「子どもにたちに対するアンケート（どんなときにやる気を起こしますか）」の結果から、「問題の意味や、やり方が分かるとき」や「先生が分かりやすく教えてくれたとき」に子どもの「やる気」が起こると述べている。

これらの調査から、教師が分かる授業やおもしろい授業を行うことで、児童の「学ぶ意欲」を高めることができると分かる。

3 実習校の児童の実態から

実習校では、与えられた課題をきちんとこなし、教師の言うことにも素直に従う児童が多い。しかし、与えられた課題以上のことを行おうとする児童や、自ら積極的に新しいことに挑戦しようとする児童は少ないと感じた。具体的な児童の姿としては、親や教師に認められることを目的に勉強している姿、単に黒板の内容をノートに写すだけで学習に満足している姿、「どうしてそう考えたのですか。」という根拠を求める言葉に対し、「なんとなく。」と安易に答えてしまう姿、答えが合っていれば分かっているとする姿などである。

以上のような児童の姿を、実践を通して「学びを楽しむ姿」に変えていきたいと考えた。

4 教職大学院での理論の構築から

教職大学院「カリキュラムの開発と評価Ⅰ」の授業において、「教科中心主義」ではなく、子どもの学ぶ意欲・態度・自主性に任せようという「子ども中心主義」の考え方が大切であると学んだ。このことから、現在の学校教育では、子どもが自ら考え、自ら学ぶ姿勢を育むことに重点が置かれていることが分かった。

また、「授業づくりの内容と方法Ⅰ」「実践的授業研究Ⅰ」の授業においては、「分かる」「できる」「身に付く」を実感させる「問題解決学習」の大切さについて学んだ。ここでは、教材に出会った子どもが自ら課題を見出し、解決するための効果的な働きかけを、教師が行っていくことが必要であると分かった。

これらの学びを生かした授業づくりを行うことが、児童の「学びを楽しむ姿」に結び付くということ、実践を通して自分の理論として構築していきたい。

1, 2, 3, 4の観点から、児童の「やってみよう」という思いを引き出すことで、学ぶ楽しさを実感できる児童の育成を目指したいと考えた。

Ⅲ 研究の方法

1 研究対象

連携協力校 A (教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ)

2年1組 男子15名, 女子14名 (計29名)

連携協力校 B (教師力向上実習Ⅲ)

5年1組 男子19名, 女子18名 (計37名)

2 目指す児童像

本研究では、「やってみよう」を引き出す実践を通して、以下のような「学びを楽しむ姿」を目指す。

① 「学ぶ姿勢」が身に付いてきた児童。

何度も挑戦している姿、集中している姿、こだわって取り組む姿など

② 「学ぶ意欲」が高まってきた児童。

学んだ知識を使いたくなっている姿、学んだ知識を使っている姿など

③ 自ら課題を見出し、解決できる児童。

学んだ知識で課題を解決しようとする姿

3 「やってみよう」を引き出す授業実践にあたって

やる気を向上させるための子どもへのアプローチの方法として、Jere Brophy²⁵⁾は2つの方法を挙げている。1つは「欲求理論」という、子どもの「勉強が楽しい」「もっと勉強したい」と思える欲求に働きかける方法である。もう1つは「行動強化理論」という、子どもに報酬を与えることで、その行動に価値を見出させ、繰り返し行わせることでやる気の向上につなげる方法である。「行動強化理論」は、子どもの変容を捉えやすいことから、簡単に実践ができる。例えば、子どもが課題を達成できた際、シールやスタンプなどを与えるといった方法がこれにあたる。報酬が視覚化されるため、子どもは学びに対する喜びを実感しやすいだろう。しかし、最終的には「欲求理論」のように、子どもの「勉強が楽しい」「もっと勉強したい」と思える欲求に働きかける方法が必要である。このことから、児童の「やってみよう」という内的動機づけを引き出し、「学ぶ」という内容自体におもしろさを見出させるような授業づくりが必要であると考えた。

また、Jere Brophyは、教師が行う働きかけをより効果的にするためには、学習コミュニティの形成が重要であると述べている。そして、学習コミュニティを築く上で達成すべき重要な課題として、①教師が自分自身と学級を子どもにとって魅力的なものにすること、②個人的、協同的な学習目標に子どもの注意を集中させ、目標達成を支援すること、③学ぶ価値のあることを、子どもがその価値を理解できるやり方で教えることの3つを指摘している。

学校における児童の生活の場は、学級が主となる。学級は、「出会い」「遊び」「学び(学習)」など、様々な要素で構成されており、各要素は児童にとって魅力的なものである。ここではその要素の1つである「学習」に焦点を当てていく。

私は、「学習」を魅力的なものにしていくために、児童の「やってみよう」を引き出す授業実践を行う。この実践を行うにあたり、まずは、児童が「やってみよう」と思える学級が必要であると考えた。そこで、第1次実践を、「やってみよう」の土台となる学級づくり

の実践として位置付けた。ここでは、「基本的な生活習慣の育成」と「望ましい人間関係の形成」を通して、児童一人一人が「気持ちよく過ごせる教室」の実現を目指すことにする。このねらいの達成が、Jere Brophyの指摘する課題①の達成へとつながり、「やってみよう」を引き出すための環境づくりになると考えた。

また、児童の「やってみよう」を引き出すためには、教師が分かる授業やおもしろい授業を行う必要がある。そこで、第2次実践を、児童の「やってみよう」に迫る授業づくりの実践として位置付けた。Jere Brophyの指摘する課題②の達成に向けては、学習目標の達成を意識した授業展開が必要であり、そのためには児童の発達段階を考慮した支援と、教材に対する理解が不可欠である。そして、課題③の達成に向けては、児童に「分かる」「できる」「身に付く」を実感させる授業展開の工夫が必要である。このことから、「児童の発達段階の考慮」「教材の理解」「授業展開の工夫」という3つの視点を軸に、分かる授業やおもしろい授業を展開していくための教師力向上を目指すことにした。

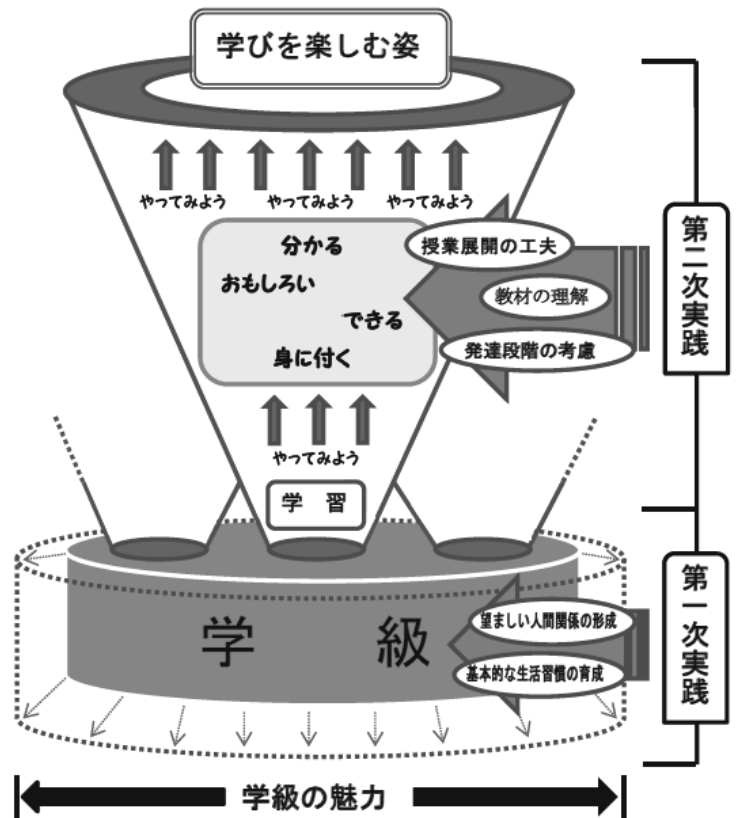
4 研究の仮説

- ① 基本的な生活習慣を身に付けさせることができれば、児童の学級生活に対する意欲を高めることができるだろう。
- ② 互いを尊重し、よさを認め合う人間関係を形成させることができれば、児童の学級生活に対する意欲を高めることができるだろう。
- ③ 発達段階を考慮し、児童の視点に立って授業を展開することができれば、児童のやる気を高めることができるだろう。
- ④ 児童にとって最も身近な教材である教科書の研究を徹底して行えば、着目させたいこと、つまずきやすい場所、その対策などを明らかにして授業に臨むことができるだろう。
- ⑤ 教えることを精選し、思考の流れを生み出すように授業展開を工夫すれば、児童が自ら考える力や学ぼうとする意欲を高めることができるだろう。

5 研究の手だて

- 仮説①に対する手だて①
「整理・整頓」を心がける生活習慣の育成
- 仮説②に対する手だて②
「気持ちよくなれる言葉」による人間関係づくり
- 仮説③に対する手だて③
「児童のノート作成例」を基にした板書づくり
- 仮説④に対する手だて④
「教科書研究シート」の作成
- 仮説⑤に対する手だて⑤
「分かっていること」と「知りたいこと」をおさえさせる授業展開

6 研究構想図



【図2】研究構想図

7 研究の計画

	教師力向上実習Ⅰ（5月13日～6月7日）
第一次実践	手だて①「整理・整頓」を心がける生活習慣の育成 ◆道徳 ひきだしの中〈1-（1）節度，自立，自立〉
	手だて②「気持ちよくなれる言葉」による人間関係づくり ◆特別活動（学級活動） 正しい言葉遣い
第二次実践	手だて③「児童のノート作成例」を基にした板書づくり ◆算数科 長さ（9時間完了）
	教師力向上実習Ⅱ（9月24日～10月18日）
	手だて④「教科書研究シート」の作成 手だて⑤-1 「分かっていること」と「知りたいこと」をおさえさせる授業展開（低学年） ◆算数科 ふえたりへったり（3時間完了） 計算のじゅんじょ（2時間完了）
	教師力向上実習Ⅲ（11月12日～11月22日）
	手だて⑤-2 「分かっていること」と「知りたいこと」をおさえさせる授業展開（高学年） ◆算数科 面積（13時間完了）

IV 実践内容

1 第1次実践

手だて①「整理・整頓」を心がける生活習慣の育成

(1) 児童の実態

2年1組の児童は、教師の指示に従って正しく行動しようとする場面が多く見られる。下校前に机や椅子を整理・整頓するように指示があれば、その一言できちんと気付いて行動することができる。

しかし一方で、教師の指示のない状況では、身の回りが乱雑になっていても平気でいたり、机の中やロッカーの中がいない物でいっぱいになっていても気に留めなかったりする場面が見られる。

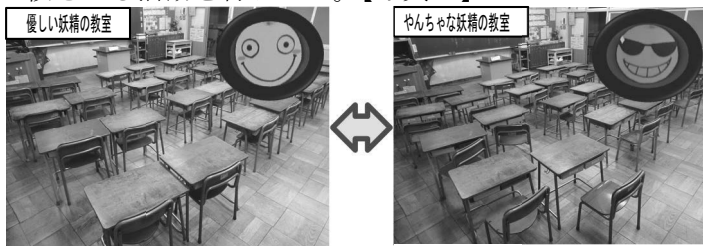
(2) 実践のねらい

物の整理・整頓に心がけるといった基本的な生活習慣は、生涯にわたる行動の規範となるため、低学年の児童にとって欠かせない指導内容である。そこで、本実践では、児童の実態を踏まえ、進んで整理・整頓しようとする意欲をもたせることから、一人一人が「気持ちよく過ごせる教室」をつくることをねらいとする。

(3) 実践の様子と考察

<道徳 5月16日(木) 実践>

資料「ひきだしの中」を用いて、実践を行った。資料の主人公が整理・整頓を行う様子から、身の回りを整えることの大切さと、整理・整頓後のすがすがしい気持ちを感じ取らせた。そして、道具箱の整理・整頓を通して、その気持ちを実感させる活動を行わせた。また、児童の整理・整頓に対する意欲を、自分の身の回りに対してだけでなく、教室全体にも広げられるように、整理・整頓されている教室(優しい妖精の教室)とされていない教室(やんちゃな妖精の教室)を、比較させる活動を行わせた。【写真1】



【写真1】「優しい妖精の教室」と「やんちゃな妖精の教室」の比較

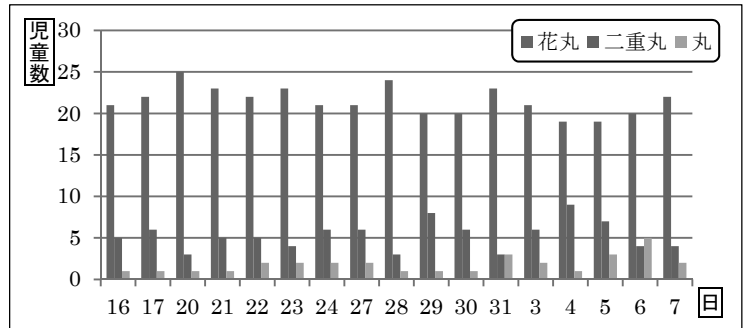
「やんちゃな妖精の教室」「優しい妖精の教室」の順に、それぞれの写真を提示した。両者の比較から、児童は、整理・整頓をして気持ちよく過ごせる教室を目指したいという気持ちを高めることができていた。

体験的、視覚的な働きかけを通して、自分たちが気持ちよく教室で過ごしていくためには、整理・整頓が欠かせないということに気付かせることができた。

実践後は、「気持ちよく過ごせる教室」の実現に向け、「帰る前に机と椅子を整頓する」「ロッカーの中をきれいにする」という2つの共通課題を児童に与えた。また、「気持ちよく過ごせる教室」の実現に必要な課題を

一人一人に考えさせ、それぞれの「自己課題」として設定させた。これらの課題の達成に向け、児童は日々の自己評価活動に取り組んだ。

この活動では、「自己課題」も含め、課題を3つとも達成できたら花丸、2つ達成できたら二重丸、1つ達成できたら丸を、それぞれ自己評価シートに記入させていった。



【図3】自己評価活動から見られる児童の継続性

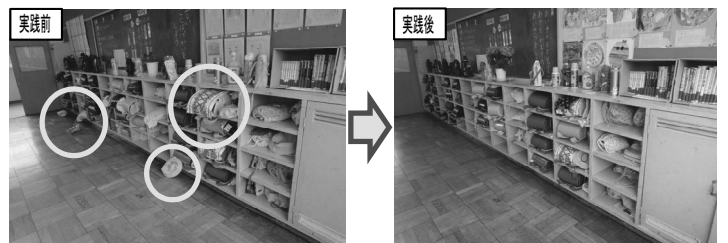
児童の花丸の数が最も多かった日が、活動から3日後の5月20日(25名)、最も少なかった日が6月4日と5日(各19名)であった。学級の児童数29名に対し、66%から86%の児童が継続して花丸を記入していたことから、整理・整頓を通して「気持ちよく過ごせる教室」をつくっていかこうとする児童の思いの強さを感じ取ることができた。しかし、少しずつではあるが、活動開始時に花丸や二重丸を記入していた児童が、活動終盤には二重丸や丸を記入するようになっていく様子も見られた。活動に対する意欲を継続させていくためには、道徳の実践内容を振り返らせる時間を設け、個々の成長を実感させる働きかけを行う必要があったと考える。【図3】

実践の成果は、以下のような形で教室に表れていた。



【写真2】机と椅子の様子

印を2か所に設定したことで、机と椅子を意識して整頓できる児童が増えた。また、自分の机や椅子だけでなく、帰りの挨拶後に教室全体を見渡して、友達の机や椅子を整頓してから下校する児童の様子も見られるようになった。



【写真3】実践前と実践後のロッカーの様子

実践前は飛び出したランドセルや、落ちた帽子、体育館シューズの袋などが気になったが、実践後は児童一人一人が「自分の持ち物は自分のロッカーにきちんとしまう」ということを意識できるようになった。

【写真2】【写真3】から、児童の整理・整頓に対する意欲の高まりを感じることができる。しかし、「教師に褒められなくて」「周囲に認められなくて」といった感情から、整理・整頓を行っている児童もまだ少なくはない。道徳の実践を通して感じ取った「すがすがしい気持ち」や、自分たちで見つけた「爽やか」という言葉を大切にさせ、今後も継続的に整理・整頓を促すような声かけ指導を行っていく必要があるだろう。

手だて②「気持ちよくなれる言葉」による人間関係づくり

(1) 児童の実態

2年1組の児童は、人を直接的に傷つけるような言葉をほとんど使わない。そのような言葉が悪い言葉であるということを理解できているように感じる。困っている友達を見かけたら、何かアドバイスを与えようと努めたり、友達の間違った行動を見かけたら、心配して正そうと努めたりすることもできる。しかし、口調が強くなってしまふことがあり、相手に優しい気持ちが十分に伝わっていない場面がよく見られる。

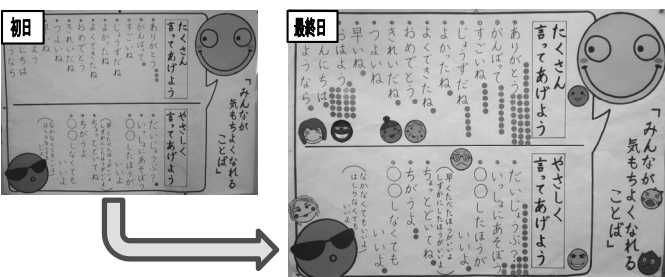
(2) 実践のねらい

友達のよさを認め合いながら、言葉かけの実践的態度を育てることは、望ましい人間関係の育成のための有効な手段であると考え。そこで、本実践では、児童の実態を踏まえ、自分や友達が「気持ちよくなれる言葉」について考えさせることから、一人一人が「気持ちよく過ごせる教室」をつくることをねらいとする。

(3) 実践の様子と考察

<特別活動(学級活動) 5月24日(金) 実践>

「気持ちよく過ごせる教室」の実現には、みんなが「気持ちよくなれる言葉」が必要であるということに気付かせ、友達への言葉かけについて考えさせる実践を行った。児童はこれまでの友達との言葉のやりとりを振り返る中で、「気持ちよくなれる言葉」と「気持ちよくなれない言葉」が存在することに気付いた。そこで、実践後に、「気持ちよくなれる言葉＝優しい妖精言葉」「気持ちよくなれない言葉＝やんちゃな妖精言葉」とし、児童の考えを基に作成した掲示による「気持ちよくなれる言葉」の体験発表活動を、毎日の帰りの会の中で行わせた。



【資料1】「気持ちよくなれる言葉」の体験発表活動

児童は掲示にある言葉で、その日に友達から「言われた体験」について発表する。発表の数1回につき優しい妖精シールが1枚貼られ、シールが10枚貯まると掲示の中に妖精(友達)が増えていく活動である。

初日のシール獲得数は5枚。「ありがとう」が最も多く発表され、名前を挙げられた児童からは嬉しそうな表情が見られた。10日間の活動であり、下校指導を優先して発表ができなかった日もあったが、児童は活動最終日までに104枚のシールを獲得し、10人の妖精を増やすことができた。【資料1】

活動を通して、児童に進んで友達のよいところを発見しようとする姿勢が身に付いてきた。また、「T君はいつもおはようって言ってるね。おはよう名人だ。」「Hさんが大丈夫? って言ってくれたから泣かずに我慢できた。Hさんは優しい。」など、児童が友達の新たな一面に気付く、学級の絆を深めることができていた点も、この活動の大きな成果であった。

児童は「気持ちよくなれる言葉」を意識して使えるようになってきている。しかし、「気持ちよくなれない言葉」の使用も見られる。「邪魔。」ではなく「ちょっとどいてね。」と言うなど、「気持ちよくなれない言葉」は、発言者の心の状態によって伝える印象を変えられることに、気付かせていく必要があるだろう。

2 第2次実践

手だて③「児童のノート作成例」を基にした板書づくり

(1) 児童の実態

2年1組の児童は、明るく素直で、真面目に学習に取り組もうとする。意欲的に挙手・発言できる児童も多く、授業には活気が溢れている。しかし、多動な傾向の児童や理解面で個別の支援を必要とする児童も若干名いる。書く作業を取り入れることやスキマの時間をできるだけつくらないように心がけ、集中が持続する時間を長くしていくように努めているところである。

算数科に関しては、興味をもって取り組む。しかし、全体の習熟状況にはやや個人差が見られる。また、問題の意味を読み取ることが苦手な児童も多い。

(2) 実践単元の指導計画

算数科：長さ(9時間完了)

時	内 容
1	○ 長さ比べに関心をもたせ、普通単位の必要性に気付かせる。
2	○ 長さを測定する単位としてcmを用いることを理解させ、正しく測定することができるようにさせる。
3	○ 長さの単位にmmがあること、1cm=10mmであることを理解させ、mmの単位まで長さを測定することができるようにさせる。
4	○ 直線の長さを測定することを通して、cmとmmの単位の関係を理解させる。
5	○ ものさしを使って、直線をかいたり見つけたりすることができるようにさせる。
6	○ 簡単な場合の長さのたし算やひき算の仕方を考えさせ、正しく計算することができるようにさせる。
7	○ 示された長さを測定したり、手や指を使ってその長さを表したりさせて、長さの量感を豊かにさせる。
8	○ 身の回りのものの長さを見積もったり、正しく測定したりすることができるようにさせる。
9	○ 練習問題を通して学習内容の確認を行わせる。

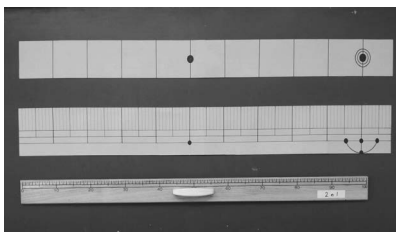
(3) 実践のねらい

低学年の児童は、自分で判断して必要な内容を取捨選択することはできず、教師の板書をそのまま一所懸命にノートに写し取ろうとする。そこで、本実践では、「児童のノート作成例」を基に、児童の視点に立った板書づくりを行うことをねらいとする。

(4) 実践の様子と考察

本実践は、算数科の「長さ」の単元を通して行った。

単元の指導にあたっては、まず、第1学年での学習を受け、児童の身の回りのものから任意単位を設定し数値化する活動から入り、問題が生じたときの解決方法を明らかにすることで、普遍単位の必要性を感じさせるようにした。また、ものさしの目盛りの読み方の指導では、拡大図を用意し、目盛りの数字を板書するなどの工夫をした。【資料2】

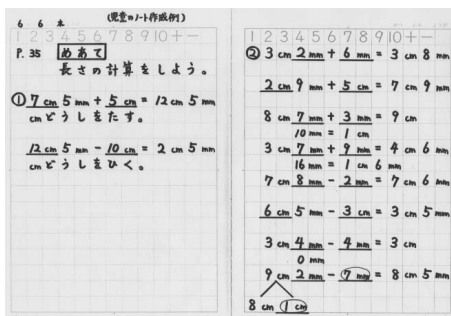


【資料2】 視覚的な教材

児童に量感をつかみやすくさせるための働きかけとして、1cmものさしと通常のものさしの拡大図を作成し、視覚的な説明を多く取り入れた。

1mm単位の学習後は、ものさしの目盛りを正確に読み取る操作活動の時間を十分に確保するようにし、端から目盛りを読むだけでなく、ものさしの途中の部分を用いた測定も組み入れた。細かい目盛りの読み取りが思うようにできない児童に対しては、cmとmmを色分けした拡大図を作成し、理解につなげていけるように働きかけた。また、長さを測り取って直線を引く方法を丁寧に指導し、基本的な操作方法を身に付けさせるようにした。そして、およその長さの見当をつけた上で測定する活動なども組み込み、長さについての量感を養っていくようにした。

単元の全ての指導において、「児童のノート作成例」を考え、これに連動する形で、児童がノートを作成しやすくなるような板書づくりを行った。シンプルかつ視覚的に分かりや



【資料3】 児童のノート作成例

すい工夫を取り入れたことで、児童がノートの作成に負担を感じないような授業を展開することができた。また、児童の視点に立った板書づくりを行ったことで、教師の説明量を省き、児童の思考場面を増やす効果も生み出していた。【資料3】【資料4】

課題としては、低学年の児童に適した文章量や、少

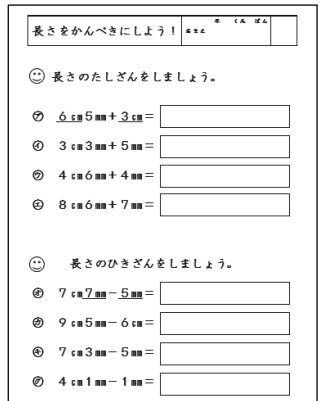
しずつノートに書かせることなどを十分に意識できなかったことが挙げられる。低学年の児童に適した文章量を考慮して板書計画を作成することや、ノートに書くタイミングの指示を意識して行うことが、児童の学びやすさや意欲の向上に大きくつながると分かった。



【資料4】 「児童のノート作成例」を基にした板書

「黒板の左側＝児童がノートに写す場所」「黒板の右側＝教師が説明に使う場所」「緑の丸印＝1マス空ける」「緑の直線＝1行空ける」など、シンプルかつ視覚的に分かりやすい工夫を板書に取り入れ、実践した。

単元の終末に行わせたワークシートの結果は、29名中14名が満点、10名が1問間違えただけであった。誤答数が2問以上であった5名の児童も、「cmやmmに下線を引いて考える」という授業で学んだ解き方を用いて、一所懸命に問題を解こうと努めた形跡がワークシートから見られ、学習課題に対して意欲的【資料5】「長さ」ワークシートに挑戦しようとする姿を感じ取ることができた。「細かい目盛りの読み取りが思うようにできない」という児童のつまずきに対し、「児童のノート作成例」を基にして視覚的な説明を取り入れた板書づくりを行ったことから、このような児童の姿を引き出すことができたと推察する。【資料5】



- 「長さ」の学しゅうでわかったことやできるようになったこと
 - まっすぐな線のこと直線とわかった。
 - 長さをはかれるようになった。
 - 長さのたし算とひき算ができるようになった。
- 「長さ」の学しゅうでおもしろかったこと
 - cmとmmが①わかっておもしろかった。
 - むずかしかったけど長さを②はかれるようになっておもしろかった。
 - ③みんなでいっぱいはかったことがおもしろかった。
- もっとやってみたいこと
 - ④みんなでもっといろいろ⑤はかってみたい。
 - 長さのたし算やひき算をもっと⑥やってみたい。
 - ⑦ノートにかいてたくさん⑧発表したい。
 - 長さのことをもっと⑨知りたい。

【資料6】 学習の感想（「長さ」の学習の感想文より抜粋）

単元を終えた際に、児童に学習についての感想文を書かせた。【資料6】

下線①②からは、児童が新しい知識を習得することにおもしろさを感じていることが分かる。また、下線⑤⑥からは、習得した知識をさらに使いたいという姿、下線⑨からは、より深い知識を習得し、分かることやできることを増やしたいという姿がそれぞれ見られる。このことから、「分かる」「できる」ようになることは、児童の「やってみよう」という思いと強く結び付いていると言える。

下線③④からは、児童が「みんな」で学習することに意欲的であることが分かる。個の学びを集団の学びへと発展させていくことが、児童のやる気を引き出すことにつながると推察する。

下線⑦⑧からは、児童がノートの作成を通してやる気を高め、発表するという自信をもつまでに至っていることが分かる。ノートの作成が児童の「やってみよう」を引き出す上で有効であったと言える。

手だて④「教科書研究シート」の作成

手だて⑤-1

「分かっていること」と「知りたいこと」をおさえさせる授業展開 (1) 児童の実態

教師力向上実習Ⅰと比較し、計算問題を得意とする児童が増えてきた。「たし算とひき算のひっ算(2)」の単元では、意欲的に計算問題を解き、自信をもって発表する児童が多く見られた。そのため、基本的な計算処理能力はある程度身に付いてきていると考える。しかし、問題の意味を読み取ることが苦手な児童が多いため、文章題を見ると「分からない」「難しい」という気持ちが先に来て、最後まで諦めずに解こうとする意欲が減ってしまっているように感じる。

(2) 実践単元の指導計画

算数科：ふえたりへったり(3時間完了)

時	内 容
1	○ 増増の場合について、順に考えたりまとめて考えたりさせる。 ○ 増増の問題を、いろいろな考え方で解けるようにさせる。
2	○ 増増の場合について、まとめて考えさせる。 ○ 増増の問題を、まとめて考える方法で解けるようにさせる。
3	○ 増減や減増の場合について、まとめて考えさせる。 ○ 増減の問題を、まとめて考える方法で解けるようにさせる。

算数科：計算のじゅんじょ(2時間完了)

時	内 容
1	○ 加法の結合法則と()の使い方を知り、()を用いた式の計算ができるようにさせる。
2	○ >, <, =の意味と使い方を知り、記号を用いて数量関係を式に表すことができるようにさせる。

(3) 実践のねらい

本実践では、学習指導案に加えて「教科書研究シート」を作成することで、児童にとって最も身近な教材である教科書から、着目させたいこと、つまりきやすい場所、その対策などを明らかにし、学習目標の達成に向けた授業を行うことをねらいとする。

また、児童の実態から、問題の意味を把握する力を身に付けさせ、意欲的に文章題に取り組めるようにさせることも、合わせてねらいとする。

(4) 実践の様子と考察

本実践は、算数科の「ふえたりへったり」と「計算のじゅんじょ」の2単元を通して行った。

「ふえたりへったり」の単元は、加減の組み合わせられた、3要素2段階の問題を加減のオペレータ(変量)に着目した考え方で解くことを目標とする。この単元を通して、児童に増増の数量に着目して「じゅんにたす」考え方と「まとめてたす」考え方の2通りの考え方を学習させた。また、「計算のじゅんじょ」の単元は、加法の結合法則と()の意味を理解し、()を含む式の計算ができることを目標とする。「ふえたりへったり」の学習を基に、加法の結合法則や()を使った式の計算、等号や不等号の使い方などについて学習させた。

2単元の全ての実践を、教科書研究を基に行った。鈴木健二²⁾は、教科書研究の最も初歩的な段階として、以下の2つのステップを提唱している。【資料7】

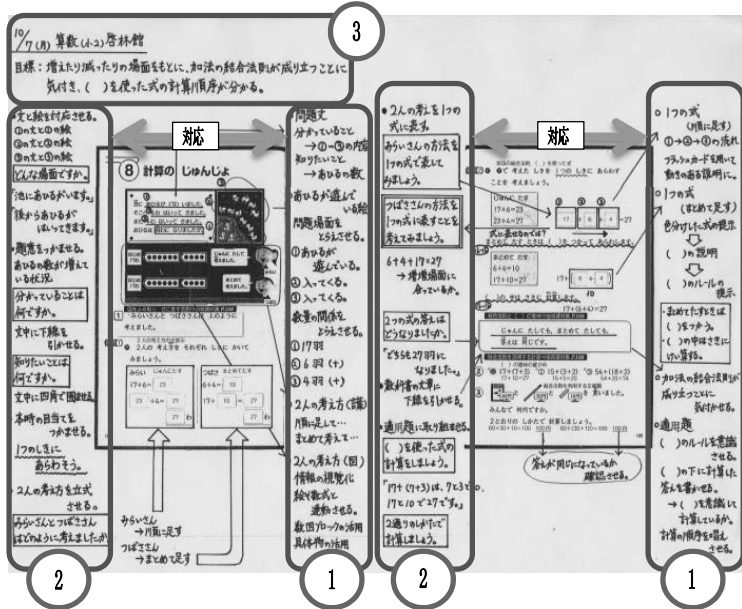
1. 単元を通して教科書を読むこと
 - 学習内容の系統性を読み取る。
 - 一単位時間ごとのポイントを読み取る。
2. 構成要素を見抜くこと
 - 意味を考え、関連付ける。

【資料7】教科書研究の基礎・基本

この2つのステップを参考に、具体的な教科書研究の手だてとして、「教科書研究シート」を作成した。教科書に記載されている文章や、写真、図、絵などの意味を細かく分析し、教科書の意図をより確実に理解することを目的とする。【資料8】

①の問題文とあひるが遊ぶ絵において、問題文を読む児童の視点から、「分かっていること」(池のあひるの数や加わったあひるの数)と、「知りたいこと」(最終的なあひるの数)を分析した。この分析を生かし、問題文から「分かっていること」に下線を引かせ、「知りたいこと」を四角で囲ませるといふ、「題意をつかませるための活動」を、②で考えることができた。また、①で「みらいさん」や「つばささん」といった児童に馴染みの深いキャラクターの考え方を、言葉や図から分析した。ここからは、情報を視覚化して児童に説明したり、数図ブロックなどの具体物を活用させて考えさせたりすることが、児童の思考を促す上で有効であ

るという仮説を立てることができ、それに対応した発問計画を、②で考えることができた。①と②から、本時の指導で児童に最もおさえさせたいことは、「()を用いた式の計算順序」であり、その理解には、「加法の結合法則が成り立つことに気付かせること」が必要になると読み取ることができた。全ての分析を通して、③の「本時の目標」を定めた。



【資料8】教科書研究シート

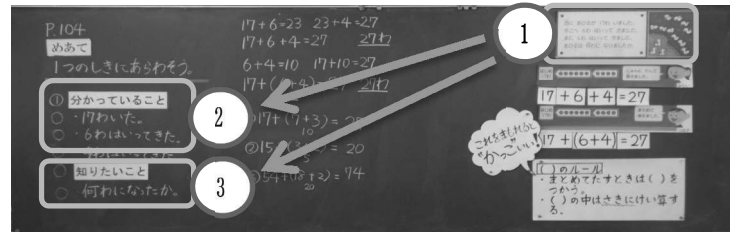
①は「分析内容」、②は「学習の流れ」、③は「本時の目標」である。まず、縮小コピーした教科書を貼り、①に教科書から得られた情報や、分析した内容などを書き込んでいく。次に、予想される児童の発言や、教師の発問計画などを、①の分析内容と対応させて②に書き込んでいく。そして、①と②から、「本時の目標」を定め、③に書き込む。以上が「教科書研究シート」作成の流れである。

「教科書研究シート」の作成を通して、教科書の内容を意味付けたり関連付けたりして分析を進めたことから、教えるべきポイントが整理され、1時間の学習目標を明確にして授業に臨むことができるようになった。また、教科書の意図をより確実に理解することで、明快な発問や指示を行うことができるようになった。学習目標の達成に向けて授業を展開するために、「教科書研究シート」の作成が有効であったと言える。

課題としては、「教科書研究シート」の作成によって指導すべき内容の理解が深まる反面、授業の中で「教えなければいけない」「行わなければいけない」といった感情が働きやすくなることが挙げられる。このような感情が働いてしまったことで、児童の思考場面よりも教師の説明場面を増やしてしまった。教師が説明をしすぎてしまう授業では、一部の理解できる児童は参加できるが、それ以外の児童は思考が止まって参加できなくなってしまう。教科書研究は欠かせないが、型にはまりすぎず、実践の中で児童の様子を見極めて授業を展

開していく力も必要であることを学んだ。

2単元を通して、文章から「分かっていること」と「知りたいこと」をおさえさせる授業展開を目指した。



【資料9】算数科「計算のじゅんじょ」板書（1時限目実践）

①は教科書の問題文、②は文章から引き出した「分かっていること」、③は文章から引き出した「知りたいこと」である。具体的な児童の活動の流れは、問題文から「分かっていること」に下線を引き、「知りたいこと」は四角で囲み、全体の発表を通して題意をつかむというものである。

2単元の終末に行わせた学習内容の確認テストからは、以下のような結果が得られた。

「分かっていること」に下線を引けた児童	「知りたいこと」を四角で囲めた児童	立式できた児童
21名	19名	24名

【表1】確認テストの結果

多くの児童が授業で学んだことを生かし、問題の意味を意欲的に把握しようと努めたことが分かる。また、文章の内容を正しく立式できていることから、問題の意味を把握する力が身に付いてきていると推察できる。「分かっていること」と「知りたいこと」をおさえさせる授業展開が、問題の意味を把握する力を高め、文章題に対する児童の苦手意識を軽減させる上で有効であったと言える。今後の実践においても、問題場面や数量の関係を捉える時間を大切にし、問題を解こうとする意欲を高めさせていきたい。【資料9】【表1】

手だて⑤-2

「分かっていること」と「知りたいこと」をおさえさせる授業展開 (1) 児童の実態

担当学級5年1組の児童は、学習への意欲が共通して高い。興味・関心の幅も広く、「知りたい」「調べたい」という思いにあふれる様子が多く見られる。また、「みんなでつくる」という学級目標の下、授業、行事の全てにおいて、自分の役割を意識し、主体的に取り組む児童の姿が目指されている。そのため、学級の全員が「つながり」の大切さを理解し、よい授業も、よい学級も「みんなでつくる」ことができることを実感できている様子である。

算数科に関しては、前時の学習内容の振り返りから（「今まで」）、本時の課題をつかみ（「これから」）、学習に取り組む（「めあて」）という流れで構成された、テンポのよい授業展開によって、児童は学習意欲を高められている。しかし、理解度には個人差があり、特

定の児童の挙手・発言が目立つため、自分の考えに自信がもてず、授業が進むにつれて自ら考えようとする意欲を低下させてしまっている児童も見られる。

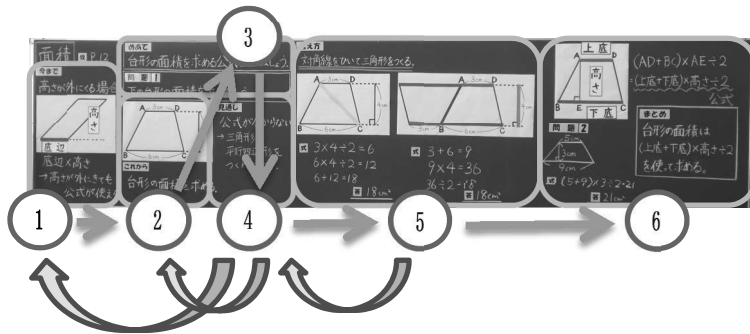
(2) 実践のねらい

担当学級で日々行われている授業構成の型を参考に、仮説⑤に基づいた実践を、高学年向けの問題解決学習に発展させて実践した。高学年という児童の実態から、自力解決に向けた「見通し」をもつことができれば、児童は「分かる」「できる」「身に付く」を実感し、「学ぶ意欲」を「学ぶ楽しさ」につなげていくことができると考える。そこで、本実践では、「分かっていること」（「前時の学習内容」）を振り返らせ、「知りたいこと」（「本時の課題」）について考えさせる授業展開で、児童が自ら考える力や学ぼうとする意欲を高めることをねらいとする。

(3) 実践の様子と考察

<算数科「面積」 11月20日（水） 実践>

本実践は、算数科の「面積」の単元の8時限目の実践を通して行った。本時の目標は、「台形の面積を求める公式を考えさせ、面積を求める公式を理解させる。」である。



【写真9】算数科「面積」板書（8時限目実践）

①は「前時の学習内容」（「今まで」）、②は「本時の学習課題」（「これから」）、③は「本時の学習内容」（「めあて」「問題1」）、④は「本時の見通し」（「見通し」）、⑤は「問題解決学習場面」（「考え方」）、⑥は「学習のまとめ」「適用題」（「まとめ」「問題2」）である。授業は①から⑥の流れで展開し、児童の思考を促していく。また、⑤でつまずく児童には④を、④でつまずく児童には①や②を振り返らせるなど、思考の流れを取り戻すための働きかけも合わせて行っていく。

指導にあたっては、まず、児童の思考を促すための知識の定着を図った。具体的な方法として、①で「分かっていること」（前時の学習内容）を振り返らせ、②で「知りたいこと」（本時の課題）について考えさせた。そして、③で「本時の学習内容」を確認させた後、①と②の比較から、③を解決するための④「見通し」について考えさせた。高さが外側にくる場合においても三角形や平行四辺形の求積公式が使えるという既習事項を、①で定着させられたことや、その知識が本時の学習課題解決の鍵になることを③で理解させられたことが、自力解決に向けた「見通し」をもたせることに

つながったと考える

自力解決に向けた「見通し」をもたせられたことで、⑤の「問題解決学習場面」では、意欲的に問題解決に向かう児童の姿を引き出すことができた。また、机間指導を通して、児童の考えを一つ一つ肯定して回ったことで、⑥の「適用題」では、学級の3分の2以上の児童の発言を引き出すこともできた。「分かっていること」（「前時の学習内容」）を振り返らせ、「知りたいこと」（「本時の課題」）について考えさせる授業展開が、児童の自ら考える力や学ぼうとする意欲を高めることにつながったと言える。

V 研究の成果

1 第1次実践

気持ちよく過ごせる教室づくりを継続して行ってきたことで、少しずつ児童の言動に変化が見られるようになってきた。



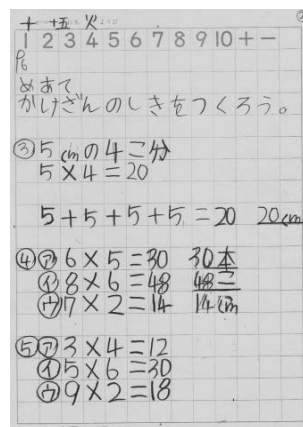
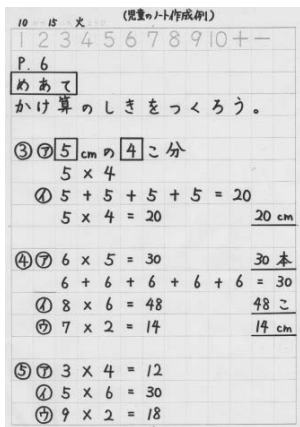
【写真4】実践から3か月後の児童の様子

実践前まで、児童は教室に物が落ちていてもあまり気に留めてはいなかった。しかし、ロッカーの前に落ちていた帽子に気付き、名前を確かめ本人まで自ら届けるという行動が見られた。また、帽子を受け取った児童は、「ありがとう」とその場できちんとお礼を伝えることができおり、「気持ちよくなれる言葉」を無意識に扱えるようになっていた。学級生活に対する意欲の高まりから、「やってみよう」を引き出すための環境づくりが有効であったと言える。

2 第2次実践

「児童の発達段階の考慮」「教材の理解」「授業展開の工夫」の3つの視点を軸に、分かる授業やおもしろい授業の実践を心がけてきた。

「児童の発達段階の考慮」の視点を軸にして取り組んだ「児童のノート作成例」を基にした板書づくりは、算数科の全ての実践の中で継続して行った。行やマス目の使い方を意識し、板書に忠実なノート作成を行う力が高まってきている様子が分かる。また、「長さ」の単元と比較すると、「かけ算（1）」の単元では、ノート作成にかかる時間が大幅に短縮され、児童が学習課題に向き合う時間を増やすことができるようになった。ノートを作成しやすくなればなるほど、児童は学習内容に集中する時間を多く得られる。児童のノート作成を意識した板書づくりが、「やってみよう」を引き出す土台づくりとして有効であったと言える。【資料10】



【資料10】「児童のノート作成例」(左)と「児童のノート」(右)の比較

教師力向上実習Ⅱの後半に行った「かけ算(1)」の授業実践の「児童のノート作成例」と「児童のノート」である。

「教材の理解」の視点を軸にして取り組んだ「教科書研究シート」の最大の利点は、児童の視点に立って教科書研究を行える点にあったと考える。直接指導の流れや発問、指示などを書き込むことで、児童の思考の流れが見えてくるため、教科書に沿った適切な働きかけを行うことができた。教科書研究の徹底が、児童の学びやすさを引き出し、学習目標の達成に向けた授業を行う上で、有効であったと言える。

「授業展開の工夫」の視点を軸にして取り組んだ「分かっていること」と「知りたいこと」をおさえさせる授業展開では、低学年の児童は、問題において活用すべき知識と、学ぶべき知識をそれぞれ把握した上で、学習に臨めるようになった。これらが、児童の思考を促し、問題に挑戦しようとする意欲を高めることにつながったと考える。また、高学年の児童は、知識を把握するだけでなく、知識を関連付けて学習することで、自力解決に向けた「見通し」をもつことができるようになった。この「見通し」が、児童のさらなる思考を促すための鍵となり、より意欲的に問題解決へと向かう児童の姿を引き出すことにつながったと考える。「分かる」「できる」「身に付く」を実感させるための授業展開の工夫が、児童の自ら考える力や学ぼうとする意欲を高めさせる上で、有効であったと言える。

VI おわりに

本研究では、児童の「やってみよう」を引き出す授業実践を通して、学ぶ楽しさを実感できる児童の育成を図ってきた。思うように展開できなかつた実践は多く、反省点ばかりであるが、自身の仮説を基にした手だてを通して、児童の「挑戦しようとする姿」「知識を活用しようとする姿」「自力で課題を解決しようとする姿」などを引き出すことができ、「学びを楽しむ姿」に近づくことができた実感する。より多くの児童の「やってみよう」を引き出すために、本研究で得られた成果を軸に、授業力の更なる向上に努めていく所存である。

また、教職大学院2年間の学びから、様々な理論を知り、実践を通して自分の理論として構築してきたことで、理論を備えた実践的な指導力を身に付けることができた。何より、教師は日々学び続け、向上していく姿勢をもつことが欠かせないという、今後の教職人生の基盤となるであろう大切な考え方を胸に刻むことができた。教育現場に出たからも、多くの人から学ぶ姿勢を忘れず、実践し続けられる教師でありたい。

【注記】

- 注1) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学級の学習指導要領の改善について」(2008.1)を参照。
 注2) 文部科学省『OECD生徒の学習到達度調査 2012年調査国際結果の要約』(2013.12)を参照。
 注3) 国立教育政策研究所『学習意欲に関する調査研究 概要』(2000-2001)を参照。
 注4) 杉山正一『やる気を育てるじょうずな教師』(東洋館出版社.1977)を参照。
 注5) Jere Brophy『やる気をひきだす教師 学習動機づけの心理学』(金子書房.2011)を参照。
 注6) 教師のチカラ編集委員会・日本標準教育研究所『子どもを「育てる」教師のチカラ No.7』(日本標準.2011)を参照。

【主な参考文献】

1 中央教育審議会答申、学習指導要領等

中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学級の学習指導要領の改善について』(2008.1)、文部科学省『OECD生徒の学習到達度調査 2012年調査国際結果の要約』(2013.12)、文部科学省『小学校学習指導要領』(2008.3)、文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』(2008.8)、文部科学省『小学校学習指導要領解説 算数編』(2008.8)、文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』(2008.8)、文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』(2008.8)

2 学習意欲に関わる文献

国立教育政策研究所『学習意欲に関する調査研究 概要』(2000-2001) <http://www.nier.go.jp/>, 杉山正一『やる気を育てるじょうずな教師』(東洋館出版社.1977)、Jere Brophy『やる気をひきだす教師 学習動機づけの心理学』(金子書房.2011)、小野瀬雅人『教育展望 2003年9月号』(教育出版.2003)、市川伸一『勉強法の科学 心理学から学習を探る』(岩波書店.2013)、市川伸一『学ぶ意欲とスキルを育てる いま求めらるる学力向上策』(小学館.2004)

3 算数科に関わる専門的・実践的文献

算数科授業研究会『算数科教育の基礎・基本』(明治図書.2011)、志水廣『算数力がつく教え方ガイドブック』(明治図書.2011)、市川伸一『新学習指導要領対応 新版 教えて考えさせる授業 小学校』(図書文化社.2012)

4 教科書研究に関わる文献

教師のチカラ編集委員会・日本標準教育研究所『子どもを「育てる」教師のチカラ No.7』(日本標準.2011)

5 実習校に関わる資料

愛日地方教育事務協議会『小学校指導事例集』(2012.3)

【付記】

教職大学院2年間では、学校サポーター活動、特別課題実習、教師力向上実習、多様なフィールド実習など、多くの実践の場を与えていただきました。とりわけ、実習中は、連携協力校の校長先生をはじめ、諸先生方の温かい御指導・御助言があったからこそ、有意義な研究実践を行えたと感じております。お世話になった全ての先生方に、心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、学校サポーター活動、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ、修了報告書の作成において、継続的にご指導くださった大矢忠史先生をはじめ、温かく御指導・御助言くださった教職大学院の全ての先生方に、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。